



印象評定を用いたコラージュ作品の分析 : 作品印象 と性格特性・制作体験との関連

柴田, 由起

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 7(2):29-38

(Issue Date)

2014-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81006267>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006267>



印象評定を用いたコラージュ作品の分析

—作品印象と性格特性・制作体験との関連—

Analysis of collage works with the use of impression scoring —Relationship of collage impression with personality traits and collage experience—

柴田 由起*

Yuki SHIBATA*

要約：本研究は、コラージュ作品から受ける印象と、制作者のパーソナリティ特性との関連を見いだすための基礎的研究である。手続きとして、まず88枚のコラージュ作品の印象評定を行い、印象評定尺度の下位尺度プロフィールの特徴から印象別に5つのクラスタに分類し〔CLⅠ 22名 (25%), CLⅡ 9名 (10%), CLⅢ 25名 (28.4%), CLⅣ 20名 (22.7%), CLⅤ 12名 (13.6%)〕,その後、それぞれのクラスタに属する制作者のパーソナリティ傾向・制作体験と、作品印象との関連を検討した。その結果、クラスタⅡは、一風変わった親しみにくい印象を与えた作品群だが、この群に属する制作者のパーソナリティ特性は、「神経症傾向」と「開放性」が高く「外向性」の低い、いわゆる芸術家タイプであった。一方クラスタⅢに属する制作者は、「神経症傾向」が低く「外向性」、「調和性」、「誠実性」のバランスも良く安定したパーソナリティ傾向にあったが「開放性」が低く、創造的活動への関心も意欲もない事から、作品の印象は、空虚で面白みのない作品という評価であった。このように、それぞれのクラスタでパーソナリティ傾向や制作体験に違いが見られた。また作品の印象からパーソナリティ傾向を推測する際、参考になる幾つかの知見を得ることができた。

キーワード：印象評定 アセスメント コラージュ

I. 問題と目的

描画・箱庭・粘土・コラージュなどの表現療法において、クライアントの作品に投影されたこころの状態を読みとるには、経験を積み重ねる必要がある。とりわけコラージュ技法は、箱庭療法に比べて刺激材料と手続きが相当自由である。そのため偶然的な表現が生じる可能性が大きく(森谷, 1999), 作品理解はセラピストの主観や経験を頼りに行われてきた。

森谷(1999)は、コラージュ作品を解釈する際の基本的指標として、「時間軸」「空間軸」「運動軸」「前景-近景」「美しい-雑な」「内容-形式」などの判断軸を挙げ、アセスメントの手がかりを示した。中でも「形式(どのように貼ったのか)」「内容(何を貼ったのか)」は、解釈指標として重視され、制作者のパーソナリティ傾向や精神的問題を見いだすための手がかりとされてきた。

例えば、宮澤(2003, 2004)はNEO-PIR, 寺西・伊藤(2000)はロールシャッハ・テスト, 佐野(2002)はYGやMMPIなど既存のパーソナリティ・テストとコラージュ表現との関連を量的に検討し、測定されたパーソナリティ特性とコラージュ表現との関連について検討を行っている。一方で、伊藤・石井ら(2005)は、性格傾向や気質が作品に反映されると仮定したアセスメント的諸

研究の結果は一貫性に乏しく、形式的・内容的側面から数量的にコラージュ作品を分析していくことの限界を指摘し、解釈の指標としては、作品から受ける印象が有益であると述べている。確かにアセスメントを行う際、何をどのように貼ったのか、だけでなく作品から受ける印象も重要な情報であり、解釈の手がかりとなる。

この“作品から受ける感じ”は、樹木画や風景構成法など描画を解釈する場合や心理面接の中で制作されたコラージュ作品や箱庭作品を読み取り理解しようとする際には重要視されている。

藤掛(1996)は、“描画をパッと見た際の作品の奇異さや健康さ、硬さや柔らかさといった印象的な評価は、描き手の適応水準や混乱の度合いを实によくあらわしており、かなり大まかであるが描き手の状態を把握することができる”と述べ、直感や感覚による印象がアセスメントにおいて重要な役割を果たすとしている。

また岡田(1969)は、箱庭作品の特徴を玩具のみから見ていくのではなく箱庭から受ける“全体の感じ”を重視し、形容詞対20項目から成る箱庭作品の印象評定尺度を作成し、統合性次元、充実性次元、力量性次元、柔軟性次元の四つの次元を抽出した。そしてその尺度を用い、健常群と精神疾患群の箱庭作品を評定し

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程

たところ、精神疾患群の作品は、すべての次元で健常群より低く評定されていたことから、印象による診断性は高いと報告している。

一方で、印象によるコラージュ作品の評価は、森谷（1999）の判断軸に挙げられている「暗い－明るい」「現実的－空想的」「弱い－強い」「柔らかい－堅い」「醜い－美しい」などは、解釈の参考にされてきたものの、客観的指標として検討はされてこなかった。そのような中、今木（2004）は、事例研究において、コラージュの全体的雰囲気伝えるために、「明るい」「丁寧」「不気味」などの印象が記述される事に注目し、印象を客観的に評定する方法として、単極性の評価法であるコラージュ印象評定尺度（CISS: Collage Impression Scoring Scale 以下 CISS と略す）を作成し、「安定性」「表出性」「創造性」の3つの因子を抽出した。そして一般成人と統合失調者の作品印象を比較し、一般成人の方が統合失調者に比べ、全ての下位尺度において評定値が有意に高いという結果を得た。

しかし単極性の評定尺度については、松浦（2001）が指摘するように、評定者の負担が軽いという利点があるものの、反対語が示されていない分、形容詞の意味があいまいになる恐れがある。さらに“賑やかな－寂しい”“くつろいだ－緊張した”というように反対語にも重要な意味が含まれており、本研究のように作品を印象から分類する場合には、より明確に意味を捉える必要があるため、2極性の評定尺度を選択することにした。

以上のことから、本研究では岡田（1984）が制作した2極性のSD法による印象評定尺度をもとに独自の尺度を制作した。その中には、作品から受ける印象を幅広く捉えるために、コラージュ作品特有の独創的・芸術的な表現（今木，2004）に対応する形容詞対や絵画印象を評定する際に用いられている形容詞対も加えた。

先に述べたように、伊藤・石井ら（2005）や青木（2011）は、性格傾向・気質が作品に反映されるとするアセスメント的研究は、一部の精神疾患や障害を持つ患者以外安定した再現性が得られていないと指摘し、作品の印象によるアセスメントの可能性に言及している。しかしコラージュ作品の印象からパーソナリティ特性や心理的問題を見いだす試みは十分に行われておらず、今後研究を重ねていく必要があると思われる。

そこで、本研究ではコラージュ作品の印象から制作者のパーソナリティ特性を捉えられるために、まず第3者（評定者）による印象評定を基に作品を分類する。そして分類されたそれぞれの作品の制作者の制作体験と、制作者のパーソナリティ特性との関連について検討し、そこからアセスメントに役立つ知見を得る事を目的とする。

制作体験とは、制作時にその人が思ったことや感じた事など、その人自身の体験のことを言い、本研究では、鈴木・佐藤（2000）の“コラージュ質問紙”を使用する。またパーソナリティ特性については、性格特性を多次元で捉えるためにNEO-FFI 人格検査の5つの主要な次元（神経症傾向・外向性・開放性・協調性・誠実性）を用いる。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象者と調査時期

あらかじめコラージュ制作の承諾を得られたA大学、B大学の大学生88名（男性38名、女性50名 平均年齢19.56 SD1.23）を対象に、2010年6月、7月、心理学の授業内にコラージュ制作を依頼し、そこで制作された作品とその制作者を分析対象とした。対象者はコラージュ制作未経験者であった。

2. 実施方法

コラージュ制作前に、NEO-FFI 人格検査に記入を求め、その後コラージュ制作を依頼した。制作後には、コラージュ質問紙への記入を求めた。コラージュ制作については、あらかじめ、白色のコラージュ用の台紙（四つ切り）を配布し、「ここにある（各自持参した）雑誌やパンフレットから、心が引かれるもの、興味があるものなどを選び出し、切り抜いて、画用紙の上に好きなように貼ってください」と、教示した。所要時間は質問紙記入とコラージュ制作を合わせて90分であった。

3. 質問紙構成

1) 印象評定尺度

この尺度は、岡田（1984）が箱庭作品の印象を数量的に捉えるために制作した2極性のSD法による印象評定尺度（20項目）から、「男性的－女性的」を省き、「深い－浅い」を「深みのある－表面的な」に変え、コラージュ作品から受ける印象を正確かつ詳細に捉えるために、新たに15項目を追加したものである。追加した15項目のうち11項目は、井上・小林（1985）の従来のSD法研究で使用頻度の高かった形容詞対をまとめたものの中から、絵画の印象を評定する際に頻繁に使用される形容詞対を選択し、さらに今木（2004）のCISSを参考に、創造的・芸術的な印象を評価する4項目を2極性の尺度に変更して追加した。項目の選定は、筆者を含む臨床心理士4名が行い、合計34項目の尺度とした。評定は7段階で回答し、「7」に近いほどポジティブ、「1」に近いほどネガティブ、中間値を「4」とした。

2) NEO-FFI 人格検査 (NEO-PI-R) の短縮版)

NEO-PI-Rの短縮版で、5つの主要な次元（神経症傾向・外向性・開放性・協調性・誠実性）から各12項目、計60項目の質問で構成される人格検査である。青年から老年までの幅広い年齢層とともに標準化されている。回答は「非常にそうだ」から「全くそうでない」までの5件法で回答する。

3) コラージュ質問紙 (鈴木・佐藤，2000)

鈴木・佐藤（2000）の「コラージュ質問紙」は、30項目の質問から、制作による心理的効果を検討するために作成された。「強く思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答する。本研究では、制作体験を把握する事を目的とした為、「コミュニケーションの促進」を問う4項目と、素材についての問い2項目を削除し、制作者が“どのような体験をしたのか”を知るための指標とした。

4. 分析手続き

まずコラージュ作品を3名（臨床心理コースの大学院生）が、印象評定尺度にそって各自評定を行った。その評定が評定者間でどの程度一致しているかを調べるために、級内相関係数（ICC:Interclass Correlation Coefficient）（Shroter&Fleiss, 1979）を求め、 $ICC(2, 3) = .864$ と、評定者間の一致率は十分な結果であった。以下に分析手順を示す。

- ① 評定者3名の評定点の平均値を得点として因子分析を行い、作品の印象を特徴づける因子の抽出を行った。次にそれぞれの作品の印象を類型化するために、各因子の下位尺度得点をもとに、Ward法による階層的クラスタ分析を行い、十分にクラスタの特徴を把握した上で、以下の内容について検討を行った。
- ② 各クラスタに属する制作者の制作体験と作品の印象との関連を検討する。
- ③ 各クラスタに属する制作者のパーソナリティ特性と作品の印象との関連を検討する。

Ⅲ. 結果と考察

1. 印象評定尺度の尺度構成とクラスタ分析による作品印象の類型

1) 印象評定尺度の尺度構成

まず印象評定尺度34項目について因子分析（主因子法、Promax回転）を行い、初期固有値1以上を基準に因子数を想定し、因子負荷量.45に満たない7項目を除外した。除外した項目は「深みのある－表面的な」「のびのびした－こせこせした」「安定した－不安定な」「調和した－不調和な」「丁寧な－粗雑な」「外向的な－内向的な」「現実的な－空想的な」であった。再度、27項目について主因子法・Promax回転による因子分析を行い、その結果、最終的に4因子が抽出され、累積寄与率は71.53%であった。また因子を構成するそれぞれの項目の信頼性の検討を行った所、第4因子は $\alpha = .67$ と低い数値だったが、それ以外の因子は十分な数値が得られた。

第1因子（11項目）は、「強い－弱い」「にぎやかな－寂しい」「充実した－空虚な」「積極的－消極的」「大胆な－慎重な」「動的な－静的な」「豊かな－貧弱な」「生き生きした－生気のない」など、作品から受けるエネルギーや活動性に関する項目の負荷量が高い。つまり、この因子に含まれる項目は、表面的・形式的な側面から受ける色調、勢い、ダイナミズム、エネルギー量を捉えたものと思われる。これは、岡田（1984）の印象評定尺度における「充実性次元（豊かさ・動き・量を捉えたもの）」に相当し、今村（2006）の印象評定尺度（CISS）における「表出性因子（感情表現や積極性をとらえたもの）」に近い。しかし、因子の意味合いは、三澤・狩野（2009）の「表出性因子（作品の構図から感情表出や積極的表現、内容の積極性、強さ、にぎやかさを捉えた因子）」との類似点が多い。以上を踏まえ、第1因子を『充実性因子（ $\alpha = .94$ ）』と名付けた。

第2因子（9項目）は「明るい－暗い」「暖かい－冷たい」「くつろいだ－緊張した」「陽気な－陰気な」「柔らかな－かたい」「親しみやすい－親しみにくい」など、心地良さや親しみやすさ、明

るさや暖かさといった情動的印象に関わる項目から構成されている。つまり第2因子は、作品全体の雰囲気や作品の内容が、情緒的に受け入れやすいか受け入れにくいのかという判断によって評価されており、第1因子が形式的、記述的な項目から構成されているのに対し、この因子は、直感的、感覚的な印象を問う項目で構成されている。全体の雰囲気を捉えるという点では、岡田（1969）の「柔軟性次元（感情や態度などを示す）」と近い意味を持つと思われる。以上のことから、第2因子は「情緒性因子（ $\alpha = .94$ ）」とした。

第3因子（4項目）は「創造的－創造的ではない」「芸術的な－芸術ではない」「個性的な－個性のない」「面白い－つまらない」という創造性や個性が感じられるのか否かを問う項目で構成されている。今村（2004）は、コラージュ作品の印象評定の中で、独創的・芸術的な表現の評価は欠かせないとし、CISSの「創造性因子」が、一般成人と統合失調症患者のコラージュ作品の本質的な違いを示すための重要な手掛かりとなると述べており、本尺度の第3因子は、CISSの「創造性因子」に相当する。そこで第3因子を「創造性因子（ $\alpha = .92$ ）」とした。

第4因子（3項目）は、「成熟した－未熟な」「真面目な－不真面目な」「まとまった－雑然とした」など、作品のまとまり度合いや、成熟度を評定する項目から構成されている。第4因子の項目数は少ないが、箱庭やコラージュの表現において、雑然とした印象なのか、まとまった印象なのかは、精神的安定の指標として重視されており、印象評定には不可欠な要素だと考えられた。また樹木画の全体印象評定尺度を作成した鈴木・鎌田（1999）は「成熟度」を「パーソナリティの成熟度を反映する妥当性の高い指標の一つ」としているが、描画や箱庭においても、作品の色調、素材の内容、テーマに一貫性や統一感が見られることは好ましいとされている。以上のことから第4因子を「統合性因子（ $\alpha = .67$ ）」とした。因子分析の結果はTable 1に示す。

2. クラスタ分析による作品印象の類型化

作品の印象を類型化するために、各因子の項目得点を合計し、標準化したものを下位尺度得点とし、その得点を変量としたWard法による階層的クラスタ分析（平方ユークリッド距離）を行い、解釈可能な5つのクラスタが抽出した。各クラスタの人数は、クラスタⅠ（以下CLと表記）22名（25%）CLⅡ9名（10%）CLⅢ25名（28.4%）CLⅣ20名（22.7%）CLⅤ12名（13.6%）であった。次に、クラスタの特徴を明らかにするために、5つのクラスタを独立変数、4領域の印象評定尺度の各標準因子得点を従属変数とした一要因の分散分析を行った。その結果、全てのクラスタ間において0.1%水準の有意差が見られたため、多重比較（TukeyのHSD法、5%水準）を行った。5つのクラスタの4因子に対する平均因子得点のプロフィールはfigure 1に、多重比較の結果はtable 2に示す。

結果から「充実性因子 $F(3.83) = 27.93, p < .001$ 」では、CLⅤの得点がその他4つのクラスタの得点より有意に高く（ $p < .001$ ）、CLⅠとCLⅣの間にも有意差が見られた（ $p < .001$ ）。

「情緒性因子 $F(3.83) = 40.57, p < .001$ 」は、CLⅡの得点が、CLⅣ以外の3つのクラスタの得点より有意に低く（ $p < .01$ ）、

Table 1 印象評定尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	共通性
第1因子「充実性・活動性」因子 (t = .94)					
12強い-弱い	.948	-.367	-.065	.096	.399
17にぎやかな-寂しい	.878	.188	-.092	-.217	.606
13充実した-空虚な	.824	.030	.007	.144	.739
15積極的-消極的	.814	.024	.085	-.019	.467
22大胆な-慎重な	.730	-.176	.141	-.083	.615
6動的な-静的な	.677	.088	.006	-.154	.561
3豊かな-貧弱な	.624	.084	.149	.234	.412
9大きい-小さい	.621	-.117	.009	.162	.741
26生き生きした-生気のない	.618	.364	.064	-.025	.700
20複雑な-単純な	.525	-.104	.355	-.062	.809
8開放的-閉鎖的	.474	.319	.057	.092	.747
第2因子「情緒性(情動性) 因子」 (t = .94)					
11明るい-暗い	-.047	.970	-.054	-.224	.723
21暖かい-冷たい	-.086	.878	.146	-.068	.768
18くつろいだ-緊張した	-.206	.832	.020	.144	.707
28陽気な-陰気な	.262	.818	-.014	-.233	.663
2 柔らかい-かたい	-.295	.791	.221	.111	.528
24親しみやすい-親みにくい	.093	.708	-.133	.238	.685
16ノーマルな-アブノーマルな	.161	.614	-.414	.212	.549
19愉快な-不愉快な	.111	.593	.009	.257	.790
31気持ちのよい-気持ちの悪い	.038	.523	-.140	.482	.789
第3因子「創造性因子」 (t = .92)					
25創造的-創造的ではない	.099	-.057	.829	.231	.888
30芸術的な-芸術ではない	.058	-.042	.767	.286	.743
27個性的な-個性のない	.362	-.053	.627	-.110	.704
23面白い-つまらない	.328	.218	.597	-.002	.745
第4因子「成熟性因子」 (t = .67)					
7成熟した-未熟な	.138	-.030	.165	.687	.784
32真面目な-不真面目な	-.310	.279	.188	.480	.772
1 まとまった-雑然とした	.007	.178	.151	.476	.383
因子間相関	F1	F2	F3	F4	
F1		.442	.504	.317	
F2			.078	.505	
F3				.165	

因子抽出法: 主成分法 回転法: Kaiser の正規化を伴うPromax法

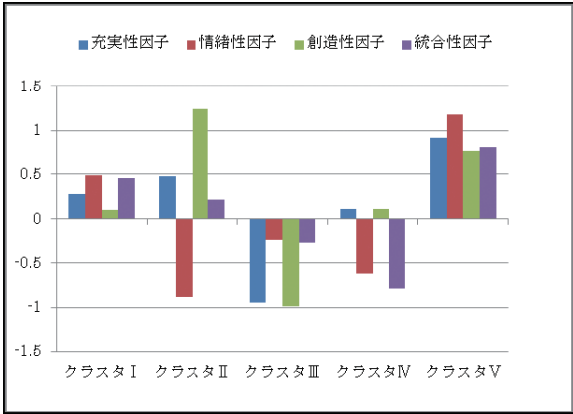


figure1 各クラスと平均因子得点のプロフィール

Table 2 クラスター別平均得点 (SD) の一要因分散分析と多重比較

	CL I	CL II	CL III	CL IV	CL V	F値	多重比較 (5%水準)
	N=22 (25%)	N=9 (10%)	N=25 (28.4%)	N=20 (22.7%)	N=12 (13.6%)		
充実性因子	0.28 (-0.60)	0.48 (-0.67)	-0.95 (0.48)	0.12 (0.68)	0.92 (0.39)	27.93 **	V > II = I > IV = III
情緒性因子	0.49 (0.39)	-0.88 (0.51)	-0.23 (0.50)	-0.62 (0.63)	1.18 (0.21)	40.67 **	V > I > III = IV > II
創造性因子	0.11 (0.40)	1.25 (0.30)	-0.99 (0.33)	0.11 (0.56)	0.77 (0.24)	70.77 **	II > V > IV > I > III
統合性因子	0.46 (0.48)	0.22 (0.58)	-0.27 (0.66)	-0.79 (0.55)	0.81 (0.26)	22.96 **	V > I > II > III > IV

*** p<.001 多重比較はTukey法5%水準である

CL V の得点は、他の4つのクラスターの得点より有意に高かった (p < .001)。「創造性因子 F (3.83) =70.77, p < .001」では、CL II の得点が他のクラスターの得点より有意に高く (p < .001), CL III の得点は他のクラスターの得点より有意に低かった (p < .001)。「統合性因子 F (3.83) =22.96, p < .001」は、CL V の得点が他のクラスターの得点より有意に高く (p < .001), CL IV の得点は他の4つのクラスターの得点より有意に低かった (p < .001)。

上記に示したように各クラスターの大まかな特徴は捉える事が出来たが、さらにそれぞれのクラスターに属する作品の印象を詳細に捉えるために、5つのクラスターを独立変数、各因子を構成する

「充実性因子 11 項目」「情緒性因子 9 項目」「想像性因子 4 項目」「統合性因子 3 項目」、それぞれ項目の下位尺度得点を従属変数とし、一要因の分散分析を行った。

その結果、「充実性因子 11 項目」では、「動的な-静的な」以外の 10 項目においてクラスター間に、0.1% 水準の有意差が見られた。また「情緒性因子 9 項目」「想像性因子 4 項目」「統合性因子 3 項目」についても全ての項目で、0.1% 水準の有意差が認められたため、多重比較 (Tukey の HSD 法, 5% 水準) を行った。分散分析と多重比較によるクラスター間の比較は table 3 ~ 6 に示す。

Table 3 クラスター別「充実性因子」11 項目の下位尺度得点の平均値 (SD) と一要因分散分析および多重比較の結果

	CL I	CL II	CL III	CL IV	CL V	F値	多重比較 (5%水準)
豊かな-貧弱な	0.47 (0.54)	0.70 (0.88)	-1.02 (0.73)	-0.22 (0.82)	1.10 (0.30)	28.64 **	V = II = I > IV > III
動的な-静的な	-0.21 (0.99)	-0.07 (1.27)	-0.09 (1.0)	0.31 (0.99)	0.11 (0.83)	0.80	ns
開放的-閉鎖的	0.56 (0.66)	0.27 (0.88)	-0.78 (0.57)	-0.50 (0.95)	1.23 (0.30)	22.81 **	V = I > IV = III, V > II > III
大きい-小さい	0.39 (0.69)	0.48 (0.86)	-0.94 (0.97)	0.11 (0.78)	0.72 (0.50)	13.34 **	V = I = II = IV > III
強い-弱い	0.19 (0.85)	0.82 (0.90)	-0.99 (0.80)	0.29 (0.52)	0.63 (0.80)	15.97 **	II = V = I = IV > V
充実した-空虚な	0.34 (0.67)	0.58 (0.74)	-0.98 (0.69)	-0.01 (1.00)	0.99 (0.32)	18.87 **	V = II = I = IV > III, V > IV
積極的-消極的	0.37 (0.51)	0.68 (0.53)	-1.12 (0.84)	0.20 (0.83)	0.81 (0.38)	25.07 **	V = II = I = IV > III
にぎやかな-寂しい	0.16 (0.82)	0.10 (0.98)	-0.80 (0.61)	0.18 (1.14)	1.00 (0.43)	10.69 **	V = IV = I = II > III, V > I
複雑な-単純な	0.08 (0.65)	1.20 (0.50)	-1.03 (0.63)	0.16 (0.89)	0.84 (0.51)	26.39 **	II = V > IV, I > III, V > I
大胆な-慎重な	0.04 (0.85)	0.81 (0.68)	-1.02 (0.85)	0.38 (0.59)	0.79 (0.45)	19.58 **	II = V = IV > I > III
生き生きした-生気のない	0.44 (0.72)	-0.15 (0.89)	-0.92 (0.63)	-0.07 (0.75)	1.35 (0.39)	25.42 **	V > I = IV, II > III

*** p<.001 多重比較はTukey法5%水準である

Table 4 クラスタ別「情緒性因子」9項目の下位尺度得点の平均値 (SD) と一要因分散分析および多重比較の結果

	CLI	CLII	CLIII	CLIV	CLV	F値	多重比較 (5%水準)
柔らかいーかたい	0.49 (0.74)	-0.45 (0.58)	-0.22 (0.70)	-0.89 (0.84)	1.38 (0.29)	24.30 ^{***}	V>I>III=II>IV
明るいー暗い	0.50 (0.63)	-1.40 (0.75)	-0.02 (0.61)	-0.62 (0.90)	1.22 (0.36)	26.20 ^{***}	V>I>III>IV>II
ノーマルなーアブノーマルな	0.57 (0.61)	-1.32 (0.84)	0.05 (0.70)	-0.69 (0.87)	0.98 (0.54)	21.37 ^{***}	V>I>III>IV>II
愉快なー不愉快な	0.57 (0.37)	-0.59 (0.94)	-0.27 (0.70)	-0.83 (0.94)	1.35 (0.31)	25.12 ^{***}	V>I>III=II=IV
暖かいー冷たい	0.58 (0.48)	-0.71 (0.76)	-0.33 (0.73)	-0.73 (0.90)	1.38 (0.34)	25.64 ^{***}	V>I>III=II, I>IV
親しみやすいー親しみにくい	0.62 (0.57)	-0.99 (0.44)	-0.22 (0.69)	-0.76 (0.87)	1.35 (0.29)	30.74 ^{***}	V>I>III=IV>II
陽気なー陰気な	0.41 (0.66)	-0.97 (1.10)	-0.47 (0.55)	-0.28 (0.92)	1.42 (0.32)	20.71 ^{***}	V>I>IV=III=II
気持ちのよいー気持ちの悪い	0.51 (0.56)	-0.74 (0.89)	-0.11 (0.83)	-0.88 (0.74)	1.30 (0.24)	24.05 ^{***}	V>I>III=II=IV
くつろいだー緊張した	0.65 (0.54)	-1.19 (0.71)	-0.15 (0.64)	-0.76 (0.77)	1.29 (0.39)	33.93 ^{***}	V>I>III>IV=II

*** p.001 多重比較はTukey法5%水準である

Table 5 クラスタ別「想像性因子」4項目の下位尺度得点の平均値 (SD) と一要因分散分析および多重比較の結果

	CLI	CLII	CLIII	CLIV	CLV	F値	多重比較 (5%水準)
面白いーつまらない	0.40 (0.44)	0.91 (0.44)	-1.27 (0.59)	0.05 (0.52)	1.14 (0.29)	69.02 ^{***}	V=II>I>IV>III
創造的ー想像的ではない	0.24 (0.42)	1.34 (0.34)	-1.21 (0.33)	-0.02 (0.72)	1.11 (0.28)	78.95 ^{***}	II>V>I=IV>III
個性的なー個性のない	0.01 (0.61)	1.20 (0.39)	-1.20 (0.56)	0.38 (0.60)	0.94 (0.31)	53.02 ^{***}	II=V>IV=I>III
芸術的なー芸術的ではない	0.19 (0.53)	1.47 (0.52)	-1.06 (0.31)	-0.24 (0.68)	1.18 (0.36)	65.99 ^{***}	II=V>I=IV>III

*** p.001 多重比較はTukey法5%水準である

Table 6 クラスタ別「統合性因子」3項目の下位尺度得点の平均値 (SD) と一要因分散分析および多重比較の結果

	CLI	CLII	CLIII	CLIV	CLV	F値	多重比較 (5%水準)
まとまったー雑然とした	0.68 (0.62)	0.37 (0.99)	-0.45 (0.72)	-0.97 (0.62)	1.03 (0.55)	25.49 ^{***}	V=I=II>III=IV
成熟したー未熟な	0.42 (0.82)	0.91 (0.66)	-0.55 (0.83)	-0.75 (0.69)	0.92 (0.57)	17.82 ^{***}	V=II>I>III=IV
真面目なー不真面目な	0.48 (0.71)	-0.04 (0.99)	-0.04 (1.09)	-0.92 (0.62)	0.77 (0.58)	10.40 ^{***}	V=I=II, V>III>IV

*** p.001 多重比較はTukey法5%水準である

3. 各クラスタの特徴

以上の結果を踏まえ、各クラスタの特徴を述べる。

CL I は、4 因子の得点差が少なく全体的に安定した評定がなされており、全ての得点が平均に近い値である。また得点プロフィールのバランスは CL V と同じであるが、全て得点が CL V を下回っている。特に、「充実性因子」と「情緒性因子」「統合性因子」では、クラスタ V の次に好ましい印象をもたれており、このクラスタの作品は、特に際立った特徴があるわけでもなく、目を引くようなインパクトや個性を感じられるような作品ではなく、平凡な印象を与える作品群だと推測される。そこで CL I を「平均的印象群」とした。

CL II は、「創造性因子」が最も高く「情緒性因子」が最も低いのが特徴である。「情緒性因子」の中でも、特に“暗い”“アブノーマル”“親しみにくい”“陰気な”“緊張した”という印象を持たれており、不快で親しみにくいなどの評価を受けている。一方、「充実性因子」の得点は CL V の次に高く、賑やかで豊かな印象を与えていた。さらに「創造性因子」ではクラスタ V と同様に全ての項目が高く評定され、個性的で芸術性の高さを感じる作品群であった。以上の事から CL II は、心地の良さは感じないものの、芸術性が高く、独創的・創造的な印象を与える作品群だと推測される。そこで、CL II を「高創造・低情緒群」とした。

CL III は、「充実性因子」「創造性因子」が極端に低いのが特徴である。「充実性因子」では、11 項目中 10 項目が他のクラスタに比べて有意に低い得点となり、“貧弱”“空虚な”“寂しい”“消極的”といった印象を与えていた。「情緒性因子」では、平均よりやや低い得点であるが、不快な印象やアブノーマルな印象は持たれていない。「創造性因子」では、全ての項目で、他のクラスタより有意に低い得点であった。そのため、このクラスタの作品は、面白みがなく豊かさやまとまりに欠ける印象を与え、制作者の表現への積極性や制作意欲の感じられない作品群だと思われる。

る。そこで、CL III は「低充実・低創造群」と名付けた。

CL IV は、プロフィールバランスが CL II と同じで「情緒性因子」と「統合性因子」が低い。特に「統合性因子」では、全ての項目が、他のクラスタより有意に低い得点で、“未熟な”“不真面目な”“雑然とした”という印象を与えていた。また「情緒性因子」では“不愉快な”“冷たい”“気持ちの悪い”という印象を持たれており、CL II ほど奇異でアブノーマルな印象ではないが、情緒的に好ましい印象を持たれなかった作品群だと思われる。また「創造性因子」の“芸術的ではない”“創造的ではない”という評価は、CL II の印象と異なる点であるが、心地よさや、まとまった印象はないものの、それなりに個性的で動的な印象を与えた作品群だと思われる。そこで CL IV は「低情緒・低統合群」とした。

最後に CL V は、全体的に高水準の評価を受けている。「充実性因子」では、“生き生きした”“複雑な”印象が、他のクラスタより有意に高い得点であった。また「情緒性因子」では 1 項目を除く全ての項目で他のクラスタより有意に高い得点であった。例えば“親しみやすい”“陽気な”“気持ちのよい”“くつろいだ”など作品から受ける印象が情緒的に心地よいと感じられていた。このように CL V の作品は、構図のまとまり、色彩イメージ、作品内容の充実、そして情緒的にも好印象を与える作品群だと思われる。そこで CL V を「好印象群」とした。以下に各クラスタに分類された作品を例示する。

		
CLI 「平均的印象群」		
		
CLII 「高創造・低情緒群」		
		
CLIII 「低充実・低創造群」		
		
CLIV 「低情緒・低統合群」		
		
CLV 「好印象群」		

4. コラージュ制作体験とクラスタとの関連

これまで印象の違いから、作品を5つのクラスタに分類し、それぞれのクラスタの特徴を示した。印象を評定する中で、制作意欲を感じられない作品、短い時間で最大限工夫を凝らした作品、ただ台紙を埋めただけにしか見えない作品など制作姿勢の違いが作品に現れていた。そこで、制作者がどのようにコラージュ制作を体験し、その体験を如何に評価したのかを見るために、制作後に「コラージュ質問紙（鈴木・佐藤，2000）」への記入を求め、印象評定尺度における各クラスタの特徴とコラージュ制作者の制作体験にはどのような関連があるのかを検討した。まず最初にコラージュ質問紙の因子分析を行い、その結果から、各クラスタを独立変数とし、コラージュ質問紙の下位尺度得点を従属変数として一元配置の分散分析を行い、クラスタ間の得点平均値の差の検定を行った。

1) コラージュ質問紙（23項目）の尺度構成

本研究で使用した尺度は、鈴木・佐藤（2000）の“コラージュ質問紙”（30項目、4因子構造）から「コミュニケーションの促進」を問う4項目と、素材についての問い2項目を削除したものである。そのため、あらためて本尺度を構成する23項目の因子構造を明らかにするために、主因子法（Promax 回転）による因子分析を行った。初期固有値1以上を基準に因子数を想定し、因子負荷量.45に満たない4項目を除外した。再度、19項目について主因子法・Promax 回転による因子分析を行い、条件を満たさない1項目を削除し、最終的に4因子が抽出され、累積寄与率は68.59%であった。また因子を構成するそれぞれの項目の信頼性の検討を行った所、第1因子は、 $\alpha = .88$ 、第2因子は $\alpha = .88$ 、第3因子は $\alpha = .81$ 、第4因子は $\alpha = .77$ で、十分な信頼性が得られた。因子分析の結果はtable 7に示す。

第1因子（6項目）は、「自分の内面を表わせた」「現在自分の考えている思いが表せた」「いつも言えない事を表わす事が出来た」などの項目の負荷量が高く、コラージュ作品を通して自らの内的世界を表現出来たかどうかを問う項目で構成されている。この因子は鈴木らの尺度でいうと「自己への理解」に相当するが、本研究では制作者の体験として各因子の意味を捉える事を目的としているため、「自己表出体験」とした。

第2因子（6項目）は「面白かった」「楽しく取り組めた」「安らぎのひと時を過ごせた」「終了後満足感があった」など、コラージュ制作による楽しさや面白さ、そして満足感を問う項目で構成されているが、これらは鈴木ら（2000）の「自己への解放感」と「楽しさと熱中」両方に属する項目があるため、独自の解釈を行う必要があった。各項目を見ると、いずれもコラージュ制作による情緒的体験を評価する項目で構成されており、制作を肯定的に捉えたか否かがわかる内容になっている事から、第2因子を「満足体験」とした。

第3因子（4項目）は、「さわやかな開放感を味わった」「作品を完成させるのに企画力を養った」「雑誌を見てイメージが湧いた」「作品を作り終えて想像力が養えた」の4項目からなり、鈴木・佐藤（2000）の尺度に当てはまる因子はない。この因子は、制作には企画力や想像力が必要だったと感じ、こころが開放されるよ

うな体験をしたか否かが把握できる内容になっている。そこで、第3因子は「想像体験」とした。

第4因子（2項目）は、鈴木・佐藤（2000）の尺度の「楽しさと熱中」に相当する。「熱中した」「集中した」の2項目しかないが、どのような態度で制作に取り組んだのかを説明する項目として重要跡考え採用する事にした。因子名は「集中と熱中」とした。

Table 7 コラージュ質問紙（23項目）における因子構造（n=88）

	F1	F2	F3	F4	共通性
8. 自分の内面を表せた	.949	.087	-.203	-.070	.949
12. 現在自分の考えている思いが表せた	.818	.026	.007	-.027	.818
10. いつも言えないことを表す事が出来た	.752	-.056	.021	-.048	.752
2. 自分を表現できた	.657	.073	-.038	.182	.657
5. 言葉で表せないものを表すことが出来た	.629	.036	.112	.105	.629
7. 自分を分析できた	.611	-.073	.174	-.129	.611
11. 面白かった	.115	.914	-.177	.024	.115
6. 楽しく取り組めた	-.015	.871	-.052	.113	-.015
22. 安らぎのひと時を過ごせた	.056	.543	.491	-.213	.056
21. 気の向くままに作った	-.161	.510	.148	.137	-.161
23. 終了後、満足感があった	.193	.469	.297	-.038	.193
14. 意中にかえった	-.149	.063	.742	-.044	-.149
19. さわやかな開放感を味わった	-.041	.243	.732	-.035	-.041
20. 作品を完成させるのに企画力を養った	.210	-.111	.584	.068	.210
16. 雑誌を見てイメージが湧いた	.187	-.307	.493	.331	.187
17. 作品を終えて想像力が養えた	.140	.029	.448	.119	.140
13. 作品中は集中していた	-.071	.073	-.034	.786	-.071
18. 作品中は熱中した	-.047	.313	.073	.623	-.047
因子間相関	F1	F2	F3	F4	
F1		.569	.658	.464	
F2			.638	.449	
F3				.527	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うPromax法

2) 作品の印象と制作体験との関連

クラスタ間で、コラージュ体験に差が見られるのかを検討するために、5つのクラスタを独立変数、制作体験尺度の各標準因子得点を従属変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、第2因子「満足体験」に有意な差はなかったが、第1因子「自己表出体験 F (4, 83) = 2.97, $P < .05$ 」、第4因子「想像体験 F (4, 83) = 2.41, $P < .10$ 」、第4因子「集中と熱中 F (4, 83) = 3.71, $P < .01$ 」に有意な差が見られた。

そのため多重比較（Tukey の HSD 法、5% 水準）を行い、その結果、「自己表出体験」と「想像体験」では、CL V と CL I の間に、「集中と熱中」では、CL V と CL III の間に有意差が見られた（table-8）。

以下に各クラスタと制作体験との関連を述べる。

CL I（平均的印象群）は、全ての標準因子得点が平均値より低く、特に「自己表出体験」が有意に低い値を示した。このことから、この群に属する制作者は、コラージュ制作時に十分な表現が出来たという実感がなく、想像的な体験と捉える事もなく、コラージュ制作をポジティブな体験とは受け止めていなかったと考えられる。

CL II（高創造・低情緒群）は、「想像体験」が最も低く、熱中したという実感はあるものの、想像的な体験をしたという実感はなく、満足感も得ていない。このクラスタの作品は、個性的で創造的な作品という評価を受けているが、制作者はコラージュを

制作する過程で、特別な時間を過ごしているという思いはなく、想像的体験を実感していない人が多かったと思われる。

CLⅢ（低充実・低創造群）は、全ての尺度得点が平均値を下回り、特に「集中と熱中」が有意に低く、表現への意欲は低く満足感も得られていなかった。このクラスに属する制作者は、コラージュ制作への意欲が乏しく、コラージュ制作を楽しめなかった人達だと考えられる。

CLⅣ（低情緒・低統合群）は、全ての標準因子得点が平均を上回り、制作への姿勢は積極的だとは言えないが、表現出来たという思いとともに、想像的な体験も実感しており、CLⅤに次いで、肯定的な体験をした群である。

CLⅤ（好印象群）は、全ての側面で制作体験を高く評価しており、最もコラージュ制作を楽しみ満足感を得た群であった。このことから、見る側に好印象を与える作品の制作者は、コラージュ表現を肯定的に捉え、創造的体験に熱中し自己理解に繋がるような体験をしていたと言えるだろう。

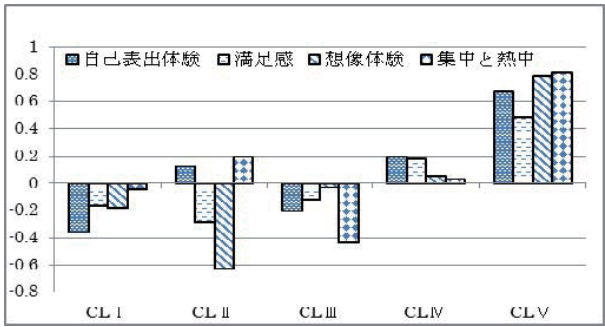


Figure2 5つのクラスと平均因子得点のプロフィール

Table8 クラス別制作体験尺度の各標準因子得点の一要因分散分析と多重比較

	CLⅠ	CLⅡ	CLⅢ	CLⅣ	CLⅤ	F値	
自己表出体験	-.368 (80)	.127 (90)	-.237 (72)	.252 (126)	.652 (113)	2.97 *	V > I
満足体験	-.127 (102)	-.224 (99)	-.157 (109)	.129 (97)	.514 (71)	ns	-
想像体験	-.186 (81)	-.570 (65)	-.033 (95)	.111 (120)	.652 (90)	2.41	V > II
集中と熱中	-.044 (94)	.190 (93)	-.440 (108)	.024 (97)	.815 (46)	3.71 *	V > III

*** p_001 多重比較はTukey法5%水準である

5. 各クラスと NEO-FFI 人格検査の下位尺度との関連

印象評定尺度における各クラスの特徴と NEO-FFI 人格検査の下位尺度との間にどのような関連があるのかを検討するために、各クラスを独立変数とし、5つの基本的特性次元である「神経症傾向」「外向性」「開放性」「調和性」「誠実性」の尺度得点を標準化した値を従属変数として一元配置の分散分析を行い、クラス間平均得点の差の検定を行った。

結果、「神経症傾向」「開放性」に有意な差はなかったが、「外向性 F (4, 83) =3.51, P < .05」,「調和性 F (4, 83) =2.78, P < .05」,「誠実性 F (4, 83) =2.55, P < .05」に有意な差が見られたため、多重比較（Tukey の HSD 法, 5% 水準）を行った。その結果,「外向性」では、CLⅤと CLⅡの間に有意差（P < .05）があり、「調和性」と「誠実性」では、CLⅤと CLⅣ、Ⅱの間に有意傾向（P < .10）が見られた（Table9）。

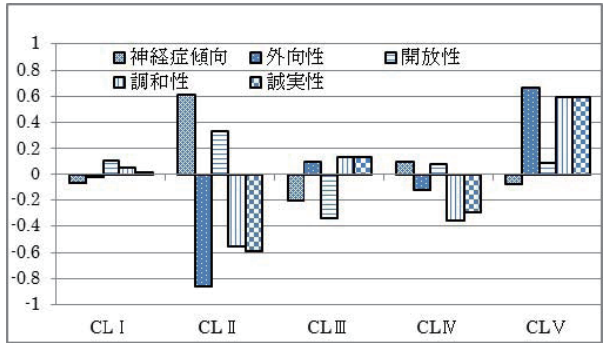


Figure3 NEO-FFI の下位尺度平均因子得点のプロフィール

Table9 クラス別 NEO-FFI 人格検査の下位尺度の各標準因子得点の一要因分散分析と多重比較

	CLⅠ	CLⅡ	CLⅢ	CLⅣ	CLⅤ	F値	
神経症傾向	-.071 (109)	.610 (88)	-.202 (107)	.101 (81)	-.075 (102)	ns	ns
外向性	-.021 (76)	-.856 (99)	.101 (99)	-.121 83	.672 (94)	3.51 *	V > II
開放性	.113 (84)	.338 (152)	-.334 (108)	.084 (74)	.095 (100)	ns	ns
調和性	.063 (84)	-.548 (107)	.139 (99)	-.356 (90)	.599 (80)	2.78 *	V ≥Ⅳ, Ⅱ
誠実性	.021 (98)	-.583 (67)	.136 (96)	-.290 (89)	.598 (123)	2.55 *	V ≥Ⅳ, Ⅱ

*** p_001 多重比較はTukey法5%水準である

6. 作品印象とのパーソナリティ特性との関連

CLⅠ（平均的印象群）は、5つの基本的特性次元の得点差が少なく、どの因子も平均値に近い得点であることから、この群に属する制作者は、積極的に人と関わるタイプではないが、比較的安定したパーソナリティ特性を持つ人たちだと思われる。

CLⅡ（高創造・低情緒群）は「神経症傾向(情動の過敏性を示す)」

の得点が高く、「外向性（心的エネルギーが他者や物などの客体に向けられている性質）」の得点が低いのが特徴である。また「開放性（創造性や好奇心の度合い）」は、クラスの中で最も高い値で、「調和性（協調性の度合い）」と「誠実性（自己統制の度合い）」は、最も低い値であった。以上のことから、CLⅡに属する人は精神面で不安定な所があり、社交的・協調的ではないが、創造力に

富み、独特の感性や感受性を持ち、興味のある分野には積極的な関心を示すタイプであると思われる。

CL Ⅲ（低充実・低創造群）は、「神経症傾向」と「開放性」の得点が全クラスタの中で最も低い値で、「外向性」「調和性」「誠実性」は、CL Ⅴの次に高い値であった。このクラスタに属する人は、精神的健康度は高い方になる。しかし「開放性」の得点が低いことから、芸術表現や創造的活動に関心がなく消極的なタイプで、現実的で保守的なパーソナリティを持つ人達だと思われる。

CL Ⅳ（低情緒・低統合群）は、各尺度の得点バランスが、CL Ⅱと同じであるが、CL Ⅱよりも「神経症傾向」と「外向性」得点差が少ないというのが特徴である。CL Ⅱに属する人と同様に、人との関わりに消極的で、一風変わった感性を持っているが、CL Ⅱほど精神的健康度が低いわけではない。

CL Ⅴ（好印象群）は、「外向性」「調和性」「誠実性」の得点が他のクラスタに比べ、突出しているのが特徴である。また精神的な健康度が高く、最もバランスのとれたパーソナリティ特性を持つ群だと思われる。

7. 各クラスタにおけるパーソナリティ特性と制作体験との関連

本研究では、コラージュ作品の印象評定尺度の下位尺度プロフィールの特徴から、作品の印象を分類し、分類された作品群ごとに制作者の制作体験とパーソナリティの特性を明らかにした。作品の分類では5つのクラスタが抽出され、各クラスタで、制作体験や性格特性の違いがみられた。

CL Ⅰ（平均的印象群）は、可もなく不可もなく平凡な印象を与えた作品群で、何か一工夫がなされている訳でも、これと言った特徴があるわけでもなく無難に全体をまとめているという印象である。パーソナリティ傾向は、5つの基本的特性次元である「神経症傾向」「外向性」「開放性」「調和性」「誠実性」が、ほぼ平均値に位置し、比較的安定したパーソナリティ傾向を持つ人達である。またこのクラスタに属する人は、制作時に「自己表出体験（自分の内面や現在の思いを表せたという体験）」を実感しておらず、制作意欲や創造的体験に対する姿勢は前向きではなかったと思われる。

CL Ⅱ（高創造・低情緒群）の作品は、個性的で芸術性の高さを感じさせる一方で、アブノーマルで気持ちの悪い印象を与える作品も含まれていた。形式的には目を切り抜く、身体の一部を切断する、すぐ替え、顔を黒で塗りつぶすなど、ひと工夫加えられた作品が多く、内容的には焼かれた死体の写真や、グロテスクな写真を選択する人の比率が高く、表現特徴からは、対人不安や緊張の高さを窺わせるような、不気味な印象を受ける作品が見られた。

また、このクラスタに属する人はコラージュの制作を創造的体験と捉えておらず満足感も得ていないが、集中して制作に取り組む作品完成への意欲は高かったと思われる。パーソナリティ傾向としては、神経症傾向と開放性が高く、外向性、調和性、誠実性が低いという特徴があり、内的な感受性が強く、外界との交流に積極的ではないが、元々、芸術的感性をもち合わせており、表現活動や創造体験は特別なことではなく、むしろ表現にたけている

が故に防衛が緩みやすく表現をしすぎる傾向があると思われた。作品の印象と制作体験との関連を見ると、このクラスタに属する人は想像体験を実感していないことになるが、元々開放性が高く、独創的で想像力に富んだこのクラスタの人たちは、他のクラスタの人たちに比べ、日常の中で想像的な体験を行っているため、特別に創造・想像的体験をしたという実感が湧かなかったのではないと思われる。

CL Ⅲ（高創造・低情緒群）の作品は、作品としての面白みがなく生き生きとしたエネルギーの感じられないつまらない印象という評価を受けている。確かに作品への拘りや、熱意は感じられず、やれと言われたからやりましたというような制作意欲の感じられない作品が目立った。安定したパーソナリティを持つ「開放性」が低く、保守的で、新奇なものよりも馴染んだものを好み、芸術的なものへの関心は低いと思われる。そのため、表現行為にも関心がなく、コラージュ制作に消極的であったと考えられる。

CL Ⅳ（低情緒・低統合群）の作品は、CL Ⅱに次いで親しみにくく、CL Ⅱより雑然とした未熟な印象を与えている。しかしこのクラスタに属する人は、コラージュの制作を肯定的に捉えており、自己表現をしたという実感がある。パーソナリティ特性としては、CL Ⅱと同じプロフィールバランスであるが、CL Ⅱに属する人たちよりパーソナリティの偏りは少ない。はっきりとした色を好み、原色よりダークな色を用いた作品が目立った。また切り抜きを加工するなど、工夫を試みるものの、CL Ⅱの制作者のように芸術的センスが高いわけではないので中途半端な感じや、散らばった感じを受ける作品が多かった。しかし作品からはエネルギーが感じられ、制作意欲は高かったと思われる。

CL Ⅴ（好印象群）の作品は、色のバランスがよく、一般的に好まれる色やアイテムを用いており、動きや躍動感を上手く表現した作品群である。そのため最も親しみやすく心地のよいイメージの作品が多く、好ましい印象を与えている。また制作体験については、ほとんどの人が制作に集中し、十分に自己表現が出来たと感じ、満足感を得ている。このクラスタに属する人は、外部への刺激に積極的で、協調性に富み、人とうまく関わることの出来る安定したパーソナリティの持ち主だと思われる。芸術的な志向性が高いわけではないが、元々心理的エネルギーが高く、物おじせずに状況に合わせて楽しむことが出来、心地の良い気分や感情をそのまま表現出来る人たちである。

今後の課題

本研究では88枚のコラージュ作品を印象ごとに、CL Ⅰ 22名(25%)、CL Ⅱ 9名(10%)、CL Ⅲ 25名(28.4%)、CL Ⅳ 20名(22.7%)、CL Ⅴ 12名(13.6%)の5つのクラスタに分類し、それぞれのクラスタに属する制作者の制作体験とパーソナリティ傾向との関連を探索的に検討した。そして、それぞれのクラスタでパーソナリティ傾向や制作体験の違いがあることが明らかになり、作品の印象からパーソナリティ特性や制作体験を推測するための幾つかの知見を得ることができた。しかし、本研究はまだ探索段階であり、印象評定尺度の改善や、評定者の問題など再度検討しなければならないことが多くある。今後は、作品の印象に現れやすい個人の特性について知識を深め、さらに検討を重ねていきたい。

引用文献

- 藤掛明 (1996). 描画解釈における着眼点のパターンの分析 臨床描画研究, XI, pp122-139.
- 井上正明・小林利宣 (1985). 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, 33, (3), 253-260.
- 今村友木子 (2004). 印象評定を用いた統合失調症者のコラージュ表現の分析 心理臨床学研究, 22, (3), 217-22
- 伊藤満・石井雄吉・米田順一・宮川朋大・真栄里仁・樋口進 (2005). コラージュ研究法再考アルコール依存症者と健常者との比較から 神奈川県精神医学会誌, 55, 69-76.
- 松浦美晴 (2001) 音楽の感情的性格の測定法と評定バイアス 山陽論叢 8, 89-98.
- 宮澤志保 (2003). コラージュ作品の表現特徴とパーソナリティ特性の関連について 岩手大学大学院人文社会科学研究科研究紀要, 11, 47-53.
- 宮澤志保 (2004). コラージュ制作における表現特徴および行動特徴と性格特性との関連について 心理学研究, 75, (4), 365-370.
- 森谷寛之 (1999). コラージュ療法の実際 森谷寛之・杉浦京子(編) 現代のエスプリ, 386, 志文堂, pp.29-32.
- 西村喜文 (2011). 乳幼児のコラージュ表現の特徴—印象評定を用いた集計調査 箱庭療法学研究, 24, 2, 35-49.
- 岡田康伸 (1969). SD 法によるサンドプレイ技法の研究 臨床心理学研究, 8, 151-163.
- 岡田康伸 (1984). 箱庭療法の基礎 誠信書房
- 佐野友泰 (2002) コラージュ作品の解釈仮説に関する基礎研究 日本芸術療法学会誌, 33, (1), 15-21.
- 鈴木慶子・鎌田恭孝 (1999). バウム・テストの全体的印象評定尺度の構成 SD 法による因子的検討 大正大学臨床心理学専攻紀要, 2, 82-89.
- 鈴木由美・佐藤いづみ (2000). 大学生の授業内コラージュ作成が及ぼす心理的効果の研究 聖徳大学紀要 短期大学部, 33, 57 - 62.
- 高橋雅春 (1974) 描画テスト入門—HTP テスト— 文教書院
- 寺西佐稚代・伊藤義美 (2000). コラージュ作品の分析に関する試論 コラージュ作品とロールシャッハ・テストの結果の比較 情報文化研究, 12, 115-124.